

ため池の持つ多面的な価値についての認識がようやく高まってきた。とりわけ、本来の築造目的であった利水機能を様々な理由で失ったため池が次々と姿を消しつつある現況に危機感を感じて、様々な分野で様々な活動が始まっている。その担い手は、市民、住民、行政、専門家など多種多様である。そうした流れがあるからこそ、今回のシンポジウムのような企画が生まれたということもできる。

しかし、多面的、多様な価値の中には相互に矛盾するものが多々ある。とりわけ、親水機能あるいは市民、地域住民の憩いの場としての価値と生物多様性を保つハビタットとしての価値との間には大きな溝がある。防災機能や利水機能、さらには住民サービスを重視した行政によるため池の改変が生物多様性を大きく損なってしまう事例も多い。外来魚を投げ込む釣り愛好者への啓発や棲み分けも進んでいない。無論、ため池を潰廃してしまう旧態依然たる動きもまだまだ強い。愛知県で近年潰廃されたため池の約半分は市町村による公共事業としてつぶされたという事実がその事を物語っている。

こうした矛盾、くいちがいを越えて、ため池を守り、地域の宝として未来へ引き継いでゆくためには、どうすればよいのか。この分科会では、地域住民のため池に対する意識、価値評価の現況を把握するとともに、ため池の管理や修復に踏み出した市民、住民活動についての事例、地域の学校や学童の参加事例、および地方自治体と協働して進められている先進的事例報告などを集めて、目指すべき方向を探った。

しかし、2時間という限られた時間の中にも欲張って報告者を集めたために討論時間が限られ、目指すべき方向を深く共有するというところまでは行かなかった。ひとえにコーディネーターであった筆者の欲張り精神の責任であった。しかし、欲張っただけのことはあって、実に充実した報告が続いた。以下にその要旨を報告する。

1. 「ため池周辺住民のため池に関する意識調査結果から」西村一彦：

ため池の保全・開発・利用について、どのようにすることが望ましいのであろうか。それに答えるにはまず、人々がすでに身近にあるため池に対して、どこが好きでどこが嫌いと考えているのか、ということを知る必要がある。つまり、ため池を構成要素に分解して、それぞれの要素がどれくらいの価値をもち、各ため池がそれらをどれくらいずつもっているかということを明らかにしなくてはならない。そのような観点からの先行研究の紹介がなされた。

2. 「知多半島・美浜町における矢梨新池クリーンクラブの活動について」木村泰三：

愛知県一のため池王国である美浜町。半島特有の照葉樹林に囲まれた矢梨新池は、ゴミが投棄されて汚れてはていた。地域住民が集まって毎月1回の清掃活動が始まり、植樹や散策道の復活なども手がけている。近くの小学校の清掃活動への参加も始まっている。行政からの補助金をあえて断って、自主的なボランティア活動として取り組まれており、地域の連帯感を深める

効果もあるようであった。このグループの存在を知ったのは、ため池の自然研究会員大内秀之さんの現地事前調査からであった。

3. 「知多半島・東浦町におけるため池(厄松池、切池、飛山池)と里山を守るために」神谷明彦：

ホテイアオイが繁茂し、それが腐ってヘドロとなって蓄積するため池。繁茂した時点で除去してやれば、逆にため池の浄化につながるはず。立ち上がったボランティアグループは、ため池の継続的な水質調査と解析なども行い、確実に池を復活させている。里山とため池の一体としての保護保全という優れた提言を行っているが、行政が目覚めるまではまだ時間がかかりそうであった。神谷さんとの出会いのきっかけは、前出の大内さんによるインターネット検索のお手柄であった。

4. 「よりよい形でため池を残すために～竹村新池の保全活動から学んだこと」大内秀之（代理発表 大沼淳一）：

NPO「カエルの分校」は埋め立てられそうになった竹村新池を救出し、地域の小学校も参加するようになった保全活動を行っている。放棄された水田を多様な生物の棲む湿地として蘇らせる活動もある。これらの活動から学んだため池保全のための方策について報告された。報告は市民への意識付け、残されたため池の方向付け、支援体制づくり、学童達の利用促進、釣り人への啓発と棲み分け、などをキーワードとして展開された。埋め立てて駐車場にしてしまえという近くの小学校の親たちの声。それが粘り強い活動によって変わっていった。農林水産省補助金事業としてとんでもない池に改変されようとした時も粘り強く交渉して、生物多様性に富む池に向けて、工事の方向が改められた。しかし、横暴で身勝手な釣り愛好者達の行動については苦戦しているようで、棲み分けの必要性が強調された。

5. 「兵庫県・いなみ野ため池ミュージアム構想について」米津良純：

住民参加によるため池管理の先進地域からの報告である。ため池の数4万数千ヶ所、日本一のため池王国・兵庫県の中にあつて、東播磨地方・印南野台地は最もため池密度の高い地域である。2001年に策定された東播磨地域ビジョンの4つの柱のひとつとされた「いなみ野ため池ミュージアム創設プロジェクト」は、地域の人々が主役となって、ため池の維持・管理・利活用の新しい仕組みを構築し、継承発展させていくとうたいあげている。

米津さんは、兵庫県東播磨県民局に勤める県職員であり、ミュージアムプロジェクトの中心メンバーである。すなわち、このプロジェクトは官製プロジェクトであり、市民・住民主体のため池保全への取り組みとは根底的に異なっている。年間予算も1600万円超、関連イベントが年間250回、延参加者は25万人というビッグスケールである。さすがは日本一のため池王国の話であるが、1988年から2003年の15年間で姿を消したため池の数が15000ヶ所というのにまた驚かされた。

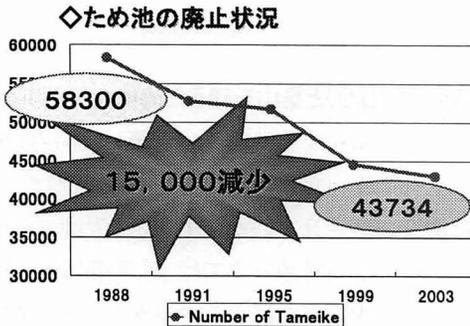


図1 兵庫県のため池減少傾向



図2 ため池王国兵庫で最もため池密度の
高いなみ野台地の風景

フィールド学習会 B コース

富田啓介(名古屋大学大学院環境学研究科地理学講座)

B コースでは、知多半島北部に存在する異なる整備状況のため池 3 地点を見学し、池やその周囲の自然環境の比較を行なうことが目的であった。ただし、道路事情により見学を断念したため池があったようにバスが通行・停車できる場所の把握が不十分であったこと、現地における説明が参加者の期待に充分添えなかったこと、突然の降雨の対応の判断に手間取った点などコーディネーターの準備・経験不足が大変目立つ結果となってしまう、目的を十分に達成することができなかった。その中で、行程の最後に向かった於大公園では、移植個体ではあるものの希少種のオニバスの開花が見学できたこと、トリゲモの生育が確認されたことなど、知多半島北部のため池がまだまだ地域の生物多様性に貢献していることを実感させるものであった。以下、見学地および見学予定地を当日の径路にしたがって簡単に報告する。

1. 七本木池 (半田市)

市街地の中のため池として見学した。コーディネーターより、半田市最大のため池であること、冬期にカモ類が多数飛来することなどを説明した。また、七本木池に関わっている参加者から池についての説明があった。

2. 明覚池 (東浦町) 【見学断念】

当初、田園の中のため池として、また、環境省 RDB で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているガガブ

タの生育地として見学する予定であった。しかし、この池へ通じる道の道もバスの通行が適わず、また、バスが通行できる道路から歩いた場合、多大な時間を必要としたことから、見学を断念した。

3. 愛知健康の森・いのちの池および蛇ヶ根池（大府市）

公園として整備されたため池として見学した。コーディネーターより、いのちの池はため池ではなく公園造成時に作られた庭園池であること、蛇ヶ根池は以前から存在するため池を公園用に整備した池であることを説明した。また、参加者からため池の防災機能などについての質問があった。

4. 於大公園・オニバスの池（東浦町）

見学を断念した明覚池の代替地として、ガガブタと同様に RDB で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているオニバスを、同町内の飛山池から移植・栽培している於大公園を訪問した。オニバスを栽培している池では、外来種のパラグアイオオオニバスも栽培されており、参加者の中から「国内の希少種をこのような外来種と並べて展示するのはいかがなものか」との声も聞かれた。また、環境省 RDB で絶滅危惧ⅠB 類に指定され、愛知県内で減少傾向にあるトリゲモがオニバスを栽培している池から見つかかり、参加者の注目を集めていた。